詩編４４編１０～２７の黙想（松見俊）

# 屠るための羊と見なされて：受難のキリストへの信従

今日は、教会暦でいうと「レント」(Lent）に入る「灰の水曜日」(Ash Wednesday)です。レントは受難節・四旬節あるいは大斎節と言い、イースター（今年は４月４日）の前の６主日を除いた（なぜ除くかというと主の日＝日曜日は復活の記念日だから）４０日間のことで、「灰の水曜日」には、イエス・キリストの受難を心に刻むために頭に灰を振りかけたり、あるいは、額に灰をつけて、懺悔の象徴とします。その起源は 2 世紀にあると言われ、イースター前夜にバプテスマを受ける志願者がこの 40 日の準備教育を受け（最初は数日であったとも言われている)、断食、悪魔祓い、犯した罪の告白、祈祷によって備えたと言われています。

先回（2021 年 2 月 3 日水曜日）の夜の祈祷会では、詩編 44 編 1 ～9 節を読みました。その際、実はこの詩の 10 節以下は「哀歌」(Lamentation) であると言いました。(エレミアの「哀歌」the Lamentations of Jeremiah 参照）なのであると言っておきました。信仰者として、また、人としての弁（わきま）えとして、若き日に一度は、「ヨブ記」と共に「エレミアの哀歌」を読んでおきましょう。

またこれも先回指摘しておいたように、詩編４４：２２は、パウロの「ローマの信徒への手紙」８：３６に引用され、キリスト・イエスの受難・苦難の物語と重ねられています。「わたしたちは、あなたのために/一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている。」羊飼いにとって羊は手塩にかけて育てたものであり、ミルクを飲み（山羊よりも乳がでないと推察しますが、申命記 34：14 参照)、イザヤ 7:21、22 などに登場する「凝乳」とは、牛、羊、または山羊の乳を皮袋にいれて激しく振り、水分と分離させてできたヨーグルトのようなもの）です。羊毛を年 2 回刈り取り、羊の肉を食べます。ただし貴重な財産でもありました。現代人のように頻繁に「ジンギスカン」で焼いて食したとは思えません。基本的に余り肉を食べないようにしましょう。羊を売るにせよ、羊の肉を売るにせよ、それは今まで飼っていた羊を手離す、切ないものであったのではないでしょうか。あるいはこれは日本人、いや私の感傷にすぎないかも知れません。有名なイザヤ 53: 7 b で言及されているよう、「主の僕」（そして、イエス様）は「屠り場に引かれる小羊のように/毛を刈る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかった」のです。イザヤ 53 章のこの苦難の主の僕は、別離と死を覚悟した羊の姿を取るイエス様を遠く指し示しているのでしょうか？

## １．嘆き

直面する苦しい、辛さを詩人は神に向かって訴えます。「しかし、あなたは我らを見放されました」「我らを辱めに遭わせ、…」(10 節)、「あなたは我らを食い尽くされる羊として国々の中に散らされました」(12 節)、「あなたはそれでも我らを打ちのめし、山犬の住かに捨てられ、死の陰で覆ってしまわれました」(20 節「やまいぬ」(タンニーム）はエゼキエル 29:3 では「鰐」創世記１：21 では「大きな怪物」。古代人の神話的生き物なのでしょう）等。ローマ 8:36 に引用されているように、詩編 44:22 節をキリスト者として先取りすれば、信仰者の生はキリストに信従する「屠られる羊」の生なのです。人が味わう苦難を罰としてあるいは訓練として解釈できれば人は救われるかも知れませんが、それを

超えた原因不明な、不条理の苦難は信仰それ自体を振るうのです。「なぜ？」「なんのために？」と問わざるを得ないのです。これは主イエスのゲッセマネの園の祈りと十字架上での絶叫の究極の問いでした。もし、神がこのイエス様にご自身を一体化させ、低みに下られたとすれば、また、主イエスが人と連帯されこの低みにおられたとすれば、「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができるでしょうか。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か（ローマ 8:35）！　しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています」ローマ 8:27 と神を賛美せざるを得ないのです。

２．神への願い！

しかし、そのような状況の中で、外敵だけでの問題ではなく、信仰さえ怪しくなるのです。そのような状況の中だからこそ、詩人は神に呼びかけ、願います。「これらのことがすべてふりかかっても/なお、我らは決してあなたを忘れることなく/あなたとの契約をむなしいものとせず/我らの心はあなたを裏切らず/あなたの道をそれて歩もうとはしませんでした。」(18－19 節)。「主よ、奮い立ってください」。「目覚めてください」(24 節)、「立ち上がって、我らをお助けください。我らを贖い、あなたの慈しみを表してください」(27 節)。10 節～20 節において信仰者は神を「あなた」として言及しています。

３．大切にしているもの

新型コロナウイルス感染パンデピックという危機の時代には、私たちが本当に大切にしているもの、信頼している方はだれであるかが顕わになるのでしょう。2021 年度のレントを「屠り場に引かれる小羊のように」黙々とアッバ・父に従った主イエスの受難、そして、復活の変容を心に留めて、意義深いものにしましょう。(春に向かうこの季節、自分の心と季節の移り行き（木の芽時）とが合致せず心のバランスを崩すこともあるでしょうが）しかし、最終的には（主なる）神の「慈しみ」(hasdekā your mercies) が救いと贖いの根拠なのです。(27 節) 神は支援のために、我らを贖うために「立ち上がる」（qūmāh ‘ezrātāh）に違いありません。